

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

MONTHLY JOURNAL of SEX EDUCATION TODAY

2023 年

No. 146

2023年5月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会

THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL https://www.jase.faje.or.jp 発行人 石川哲也 編集人 小澤洋美
© JASE. 2023 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

SEE性教育アカデミー 2022 in 京都 報告① … 1
SEE性教育アカデミー 2022 in 京都 報告② … 4
北東北性教育研修セミナー2022春 報告 … 7
新連載 わたしたちの性教育アクション② … 11

多様な性のゆくえ③ … 12
新連載 出会いは世界を広げていく② … 13
今月のブックガイド … 14
JASEインフォメーション … 15

● SEE 性教育アカデミー 2022 in 京都 報告①

性と対人関係に課題をもつ当事者の 回復を支援する SST

～生きる力をつける SST ワークショップ～

はじめに

今回のSEE性教育アカデミーは、鴨川沿いの桜が満開の3月25日(土曜日)、京都市の同志社大学今出川キャンパスで行われた。2022年度第2回目の開催になる。第1回目は、11月5日(土曜日)大阪公立大学 I-Site なんばで「性と対人関係について語る安全な場づくり～SARにつなげるネットワーキングスキル～」のテーマで行われた。それに続くものである。

SEE (Sexuality Education & Empowerment) は、「関西性教育研修セミナー」として各種講演・海外スタディツアーを企画してきた10年の実績を活かし、より系統だった性教育の学びの場を提供していくことを目的として2018年に開講したもので、これまで概ね年2回のペースでセミナーを開催してきた。

「SEE 性教育アカデミー」では、From What to Learn to How to Learn (何を学ぶかから、どう学ぶかへ) をモットーに、受講者との対話を重視したプログラムを展開している。講義内容に関する質疑応答だ



けでなく、ディスカッションや「ふりかえり」の時間を十分にとり、講師と参加者が共に学ぶスタイルをとっている。

今回のテーマは、「性と対人関係に課題をもつ当事者の回復を支援する SST ～生きる力をつける SST ワークショップ～」。SST とは英語の Social Skills Training (ソーシャル・スキル・トレーニング) のことである。SST の具体的な内容については、SEE の共同代表である野坂祐子大阪大学大学院教授が、後半(4ページ以降)で詳しくレポートしているのでそ

ちらに譲り、まず、メイン講師である前田ケイ氏についてそのご経歴を簡単に紹介する。

現在、SST 普及協会の認定講師および顧問、ルーテル学院大学名誉教授。ハワイ大学を経て、コロンビア大学大学院ソーシャルワーク修士課程を卒業後、1988 年から東京大学附属病院精神神経科デイホスピタルにおいて SST の日本への導入に尽力。その後、日本各地での精神科患者のリハビリのために SST の普及にかかわり、更生保護や矯正教育分野での SST の実践および支援者の養成に当たっている。

今回は、ご高齢にかかわらず仙台から、SEE 性教育アカデミーのセミナーのために京都まで出張してくださった。



前田ケイ氏を講師に行われたワークショップ

SST ワークショップ体験者の声

主催者の挨拶後、心理相談やケースワーカーなどに関係する職種中心の受講生 18 名、スタッフ 4 名、そして講師 2 名の全員が、円座になって 13 時より「SST 体験ワークショップ」が始まった。ワークショップの具体的な内容は、野坂祐子氏のレポートに譲って、ここでは、受講後の参加者の感想の一部を紹介する。

- グループワークの力、可能性を感じました。円座の中の小さいサークルに入って最初は見られている感があるのかなあと思いましたが、実際には「見守られている」感じを持ちました。
- 参加しないで見学だけがよくても OK 等、絶対、必ずというのがなくて自由度が高いと思いました。SST の本質が初めて見れて感謝しています。
- SST について職場で直接実施することはないのです



が、知りたくて参加しました。実際の当事者を主役と考えニーズを十分に把握して、具体的な行動リハーサルを同意と相談しながら行う点は、日々の仕事で正しい行動を押し付ける型で教えたつもりになっているのではとハッと気がつきました。

- 当事者の世界を理解することから SST が始まることを知った。貴重な体験でした。
 - 実際に見たり体験しながら SST について学べたため、大変勉強になりました。貴重な機会をいただきました。
 - 小さな子どもたちにもわかりやすい SST の取り組み方が学べるチャンスが欲しいです。小さな子どもたちからの性教育についても学んでいきたいです。楽しく学んだ一日でした。
 - とても貴重な体験をありがとうございました。SST とは……と疑問に思う部分が多かったので、得るものは本当に今回多く、また現場で生かしたいと思います。
 - 半日の開催はもったいないです。もっと時間が欲しいと思いました。新たな気づきを得てそれを現場でいかしていくつもりです。
- 体験型ワークショップは、途中 10 分ほどの休憩を挟んで、16 時近くまで約 3 時間であった。その後、2022 年 11 月 5 日に開催されたセミナーの講師であった藤岡淳子氏（大阪大学大学院名誉教授・臨床心理士・公認心理師・一般社団法人もふもふネット代表理事）との対談が約 40 分ほど行われた。

対談「STT との出会い」

テーマは、「性に係わる支援に活かす SST について」。対談は、藤岡淳子氏が前田ケイ氏に出会った場面の話



から。

その場面は、藤岡氏が少年刑務所に勤務していたときであるという。教育部門の責任者であったが、部下が全員年上の男性で、なかなか思うように進められなかった時に、その打開策として前田氏を講師としてお願いし、アグレッシブなワークショップに、そしてそこで教えられた SST に助けられたという話から始まった。

その後、話は前田ケイ氏のアメリカ留学でのソーシャルワークとの出会いに進んだ。

戦後間もなく、大学4年のときフィリピン大学に留学する機会に恵まれた。しかし、大学の許可は承認されたが、ビザが発行されなかった。理由は、女子学生がまだまだ反日感情の強い国に来るのは、生命の保障ができないということだったという。この留学のプロジェクトがアメリカの財団の主催だったこともあり、ではアメリカの大学で1年間学ばないかという提案があり、結果的にハワイ大学へ留学することになった。

日本では英文学部だったのだが、思いもしなかったハワイ大学で、英文学でなく社会学を学ぶことにし、ここでソーシャルワークに出会ったのだという。

ハワイ大学の留学ののち、奨学金を受けられることになって、アメリカ本土ニューヨークのコロンビア大学の大学院に留学できたのだという。この移動は、バスによる大陸横断だったとか、奨学金受給の幸運な出来事などエピソードを交えて語られた。大学院の2年間で、1200時間の実習などで、SSTを学んだという。当時の女性としては、たいへん希有な経験を語られた。

対談は、後半に入り、藤岡氏から「現在の日本におけるソーシャルワーク、グループワークについてご経験からアドバイスが欲しい」という要望が前田ケイ氏

にあった。

前田氏は、アメリカなどと比較して、まず「日本は遅れている」ということを自覚して、「いまできること、いまやっていること」をほかの専門職と連携して仕事を進めていくことが、実際に現場の役に立つことになるとのアドバイスがあった。ご自分の経験では、医師や看護師、作業療法士などの他の職種の人たちとの連携が欠かせないという。そして、変化する社会に対応できる学びを心掛けることを怠ってはいけないと強調された。最後に、昭和6年生まれであるという前田氏は、当時のステレオタイプの女性の生き方に対する社会情勢の中で、両親を含め、多くの理解者に出会って、今日があると締めくくられた。

対談終了後、藤岡氏の進行で、「わかちあい」が行われ全参加者の感想が述べられて、若々しい前田ケイ氏をメイン講師にむかえた研修セミナーは終了した。

最後に、対談にたいする参加者の声を紹介する。

- 実践的な知識、技術を学べるとともに勇気づけもいただきました。ありがとうございました。前田先生のご健康のヒケツを伺いたかったです。ジムに行かれているのか……。藤岡先生とのコラボ最高でした。
- 前田ケイ先生の学生時代のお話やアメリカとの違いを聞くことができて大変興味深かったです。相手のオーダーメイド……相手のニーズにあった SST 本当に参考になりました。『保護司面接のための SST』の著書を参考にし学び続けます。
- 前田先生ワールドに引き込まれました。

(文責・編集部)

※次回の SEE 性教育アカデミーセミナーは、2023 年 9 月 3 日（日曜日）仙台市で開催の予定。

◎ SEE 性教育アカデミー 2022 in 京都 報告②

支援者のスキルアップとネットワーキング を目指した SST ワークショップ

SEE 共同代表、大阪大学大学院教授 野坂 祐子

ソーシャルスキルトレーニングとは

講師を含む全員が円座になって、ワークショップがスタートした。最初に、SST について次のように説明された。「SST とは、当事者が支援者と一緒に考えながら、特定の対人状況の中で自分が取りたい行動の具体的な目標を決め、練習をして、必要な認知（考え方）と行動の能力を身に付けていく方法のこと」（前田ケイ著『保護司面接のための SST』p.2、日本更生保護協会）。主語は、「当事者」であり、支援者が〈やらなければ〉と気負うのではなく、当事者と〈一緒にやっていく〉ものである。支援が終結したあとも、当事者が自分の行動を考え、意思決定できるようになることが目指される。話し合うだけでなく、実際に練習をしてみるところが SST の核心である。

演習に先立ち、2つのルールが提示された。1つは「嫌なことはやらなくてもよい」、2つ目は「いつ質問をしてもよい」である。これは演習時だけでなく、SST の実践においても同様である。本人が「嫌なこと」に気づき、それを意思表示して行動選択するという一連の行動そのものがソーシャルスキルにつながるのだろう。いつでも「わからない」という率直な意見を歓迎し、相互的な対話を通して練習を重ねていく点も同様である。実際、ワークショップでは、受講者からの質問や意見に沿って、即興で SST 演習の課題が提示されたのだが、つねに講師は受講者の意思を確認し、どんな発言にも丁寧に返答されていた。ルールが体現され、ポジティブなロールモデル（見本）となっていた。



ここで、SST を実践しているそれぞれの受講者が取り組みの内容や疑問を発表した。支援の対象者は、子どもから成人までさまざまであり、発達障害のある子どもや家庭への支援に携わっている人も複数名おられた。講師は、発達障害のある子どもに関わるすべての職員に SST のスキルが求められるとコメントされた。日々の生活で実際に起きていることを取り上げて練習するのが肝要である。

演習に入る前に、今回の研修で「ロールプレイ（役割演技による演習）をやってみたい人」「見ていだけがいい人」など、講師から受講者の意向が確認された。席を立ったり、着席したりして、意思表示をするというだけの指示だが、少し体を動かすだけでも場が活気づき、なごやかな雰囲気になったのが印象的であった。

行動リハーサル「セックスの誘いを断る」

SST の進め方にはさまざまなものがあるが、代表的なものが「行動練習」を取り入れた方法である。近い将来、実際に起きる対人場面に備えて、本人が支援



者と相談して、その場にふさわしい行動をあらかじめ練習しておくのが「行動リハーサル」である。

今回は、若者の性の安全や健康に関わる人が多かったため、講師から「交際相手からセックスを求められたが、今は断りたい」という場面が課題として挙げられた。アメリカでは『セックスを断る 101 の方法 (101 ways to say NO to sex)』というパンフレットがあり、実際の高校生のアイデアが紹介されている。これを用いながら、男女の高校生のロールプレイを行った。

練習をする当事者がその場面を具体的にイメージできるように、支援者が〈ロールインタビュー〉をしてから始める。講師が「恋人から迫られて、困ってしまったのね」など、練習する場面を特定し、上記のパンフレットを示す形で「いろいろな言い方があるけれど、どの言い方でやってみる？」と〈練習課題〉を具体化する。これを〈ターゲット（標的）行動〉といい、必要に応じて支援者が見本を見せる（モデリング）。ロールプレイが単なる〈お芝居〉にならないように、「相手はどんなふうに言ってくるの？ いつものようにやってみてくれない？」と対象者に役割交代を求め、よりリアルな状況を設定する。

ロールプレイが終わったら、すぐに支援者が〈よかったところ〉をフィードバックする。声の大きさや言い方、内容や姿勢などを伝え、うえて、「さらによくするには…」と提案し、もう一度練習をする。演技とフィードバックを切り替えるために、支援者が〈手を叩く〉といった合図をすると、何をしているか混乱しなくて済む。「次に、そういう場面になったらやってみて。また報告してね」と伝えて終える。これを〈チャレンジ課題〉と言い、日常場面で練習していく。グループのなかで〈チャレンジ課題〉を実践する機会を設けてもよい。

行動リハーサルのポイントは、ただ練習するのではなく、〈練習課題〉を明確にすること。一般論ではなく、〈テーラーメイド〉であることが強調された。

認知再構成法「考えを変える」

感情的に反応してしまい、対人関係がうまくいかない場合、考えを変える練習をするのも有効である。研修では、相手の態度を見て「バカにしゃがって！」と怒りを爆発させてしまう事例が紹介された。「相手は自分をバカにしている」という認知（思考）が感情を生むという認知行動療法の考えを前提とし、とっさに頭に浮かんだ自動思考を別の考えに変えていく方法である。この例では、「これは修行だ」と考えることで、自分を落ち着かせたという実践が挙げられた。

グループでの SST 「気持ちを伝える」

次に、グループで「セックスを断る」場面の SST を行った。性行為を断ると同時に、パートナーを大切に思う気持ちを伝えるにはどうしたらよいか。講師がいくつかの例を示しながら、グループで意見を出し合う。ロールプレイの参加者からいろいろアイデアが出されると、講師は「一般論ではなく、この人（当事者）にとって役立つ意見を出すように」と介入し、話し合いの方向性を修正された。

グループの場合も、個人 SST と同様に、テーラーメイドの練習課題と行動リハーサルを行うことが重要である。グループの話し合いでは、参加者の体験談の〈持ちより〉になりがちだが、ターゲット行動を明確にするためには「その人の状況」を明確にする必要がある。

ここで取り上げた練習場面のよう、パートナーと



のコミュニケーションは相手のあることゆえに、〈100%うまくいく方法〉があるわけではない。「やってみよう」と本人（当事者）が思えるかが重要であり、必ずしも1回のグループでよい方法が見つけられなくてもよい。

別の視点について理解する「金魚鉢テクニック」

女性が男性パートナーにセックスを断るという課題からの流れで、受講者のうち男性だけで話し合うというグループも体験した。異なる視点について知るための技法であり、ここでは男性メンバーが「金魚鉢の中を自由に泳いでもらう」、つまり、外円のメンバーを気にせず、内円のグループだけで話し合った。

この技法は、カップルセラピーでも用いられており、自分とは異なる属性や立場の人の考えについて知る機会になる。

問題解決法のための「ブレインストーミング」

さらに、問題解決法の一例として、研修のなかで出された質問（「電気の消し忘れによる夫婦間トラブル」）を題材にして、意見を出し合うブレインストーミングを行った。問題解決法を挙げたあと、それぞれの方法の「長所（プラス面）」と「短所（マイナス面）」を書き出し、一覧表にする。実行できる解決策を本人が選び、必要があれば行動リハーサルを行う。

悩んでいる状況をひとりで考えていると、問題解決法が浮かばないものである。こうしたブレインストー

ミングは、当事者の認知レパートリーを広げることにもつながる。

自分の行動パターンをふりかえる「自己研究」

別のグループでは、「子育てに悩む母親」が例に挙げられた。講師から「浦河べてるの家」で始まった当事者研究について紹介され、子どもが自分のことを理解していく「自己研究」の実践例が示された。例えば、タブレットがやめられない子どもが「自分の心の中の状態」をキャラクターで表すなど、さまざまなやり方がある。母親役は、「親子で自己研究をやってみる」という計画を立てた。

ワークショップをふりかえって

ワークショップでは、ほかにも「思春期の子どもと親が性について話す」「タクシーの運転手と世間話をする」など、性に関する親子の会話から見知らぬ人との社交まで、流れのなかで出てきたさまざまなトピックスが扱われた。いずれのケースも、講師が何度も「本人は何に困っているの？」「それはどんな状況なの？」と、当事者の視点や課題状況を明確にしておられたのが印象に残った。

また、SSTの演習中に、支援者の見本を示す講師が「私の意見を言ってもいいですか？」「どちらがいいでしょうね」と、つねに相手の意思を確認していたことも、当事者主体の取り組みにおいて重要と感じた。練習の主体は当事者にあるが、それをマネジメントするのは支援者の役割である。そこには支援者の援助スキルと相手への関心が不可欠であり、そうした専門的でサポート的な関わりがSST、ひいては支援や教育の基本であると再認識した。

グループでのSSTが多く取り上げられ、多様な考えや感じ方を共有する〈場づくり〉について学ぶこともできた。SEEでは、SAR（Sexual Attitude Re-assessment：性に関する自己の価値・態度の見直し）の前提となる安全な場づくりと語り合いを体験する研修を継続している。今回のグループでのSSTは、それと方向性を一にするものであり、SARに向けた取り組みの一つの柱としても位置づけらる。引き続き、支援者のスキルアップとネットワーキングを目指した研修を企画・実施していきたい。